飛鳥

ASUKA

飛鳥とクルーズを愛する人のための
クラブマガジン

NO.100 WINTER

ASUKA CLUB

飛鳥
ASUKA
飛鳥とクルーズを愛する人のためのクラブマガジン
WINTER NO.100
2019年11月30日発行

発行／郵船クルーズ株式会社 ASUKA CLUB事務局
〒220-8147 横浜市西区みなとみらい2-2-1 横浜ランドマークタワー47階 TEL.045(640)5302
発行人／坂本 深
ホームページ https://www.asukacruise.co.jp/

郵船クルーズ

100回目の函館入港

2019年8月21日、飛鳥Ⅱは初代飛鳥から
通算100回目の函館入港を果たした。
函館港としても客船入港500回目の節目が重なった。
坂道に立ち並ぶ洋館や教会、朝市で食べる海鮮丼
五稜郭の美しい自然、函館山から眺める夜景など
函館の魅力はつきることがない。
しかし、それ以上に心に残るのが函館港のおもてなしだ。
出港時、岸壁に集まった市民と船上のお客さまが
一体となって踊るのは函館名物「いか踊り」。
この日も船が岸壁を遠く離れても
60人の幼稚園児たちが元気いっぱいに飛び跳ねて踊っていた。
デッキのお客さまも胸が熱くなり「また来るよー」と大きく手を振る。
旅先で何を見たか、何を食べたかよりも
こうした人とのふれあいが何よりの旅の思い出になっていく。

写真提供：函館市

セレモニーでは
函館市から記念の
ワイン100本が
贈呈されました。

函館港に停泊中の飛鳥Ⅱ

そして航海はつづく

飛鳥とクルーズを愛する人のためのクラブマガジンとして
1992年に創刊されたクラブ誌「飛鳥」も
ついに100号を迎えることができました。
これもひとえにアスカクラブ会員の皆さまのお陰です。
今回の特集はこれまでのクラブ誌の歴史を振り返ります。

クラブ誌100号のあゆみ

飛鳥とともに27年

05号 1993年11月

初代飛鳥と言えば、
田村能里子さん作「季の奏」
の壁画を思い出される方も
多いでしょう。
田村さんは高さ11メートル
最大幅9メートルの
壁画をドックで建造中の
飛鳥の中で約2か月かけて
描き上げました。

お客さまが船の仕事に挑戦するコーナー
「飛鳥よくばり体験」で1日通信長を体験された竹城さん。

04号 1993年8月

竹城さんコメント
「飛鳥はゆったりしていて乗ったらすぐ気分転換できる。
外国人クルーもみなフレンドリーで、純粋に楽しいです。
来年のリニューアルも楽しみにしています」

01号 1992年12月

記念すべき1号の特集は
「飛鳥、南へ。」グアムや
オーストラリア、フィジーなどへ
行くクルーズを紹介しています。

クルーズコーディネーター江頭紀光子
元クルーズディレクターのボブ田中
フロントオフィサー沖原幸江が登場しています。

History

1991年10月 初代飛鳥就航
1992年 4月 アスカクラブ発足
1992年12月 クラブ誌1号発行

1992年のアスカクラブ会員は約400人でした。
2013年には10万人に達し
2019年現在、17万人を超える会員組織と
なりました。

07号 1994年5月

定番となった
「夏祭り・花火クルーズ」は
就航当時から
人気がありました。

11号 1995年5月

「飛鳥まるごとQ&A」で
キャビンの紹介をしているのは
若き川上隆誌
アシスタント
ハウスキーピング
マネージャー(当時)。

17号 1996年10月

お父様が日本郵船の船医さんだった
ご縁で飛鳥に乗船してくださった
市毛良枝さん。
「お気に入りの場所はランドリー」
というお話に女性読者の皆さまも
共感されました。

25号 1998年10月

連載「港の見える風景」にドナルド・キーンさんが寄稿。
キーンさんは70号から再度寄稿してくださいました。

デザイナーが選ぶ ベストカバー

18号の表紙を飾ったのは
初代飛鳥のダイニング入口。
ディナーが始まる前
窓からは夕陽が射し込み
ふと見上げた鏡張りの天井に
広がる幻想的な世界。
100冊の中で特に印象に残る
表紙です。

52号
2005年6月

ついにクルーズ新世紀へ。
飛鳥Ⅱデビューが発表されました。

54号
2005年12月

14年間の思い出を振り返る。
さようなら、そしてありがとう
初代飛鳥。初代飛鳥はその後、
ドイツのフェニックス・ライゼン社に
売却され「アマデア」として
現在も活躍しています。

編集部が選ぶ ベストモーメント

55号のインフォメーションに掲載された1枚。
2006年3月12日改装工事を終えたアマデアと
飛鳥Ⅱが横浜港で顔を合わせました。
初代飛鳥との別れはやはりさびしかったです。

58号
2006年12月

「もっと知りたい飛鳥のこと」で
水に関する取材に協力してくれたのは
なんと赤松新キャプテン（当時は副船長）でした。

50号
2004年12月

2005年にラストクルーズを迎える
野﨑船長に特別インタビュー。
キャプテンが飛鳥で航行した距離は
地球24周半に相当しました。

55号
2006年5月

2006年2月にデビューした飛鳥Ⅱ。
就航記念号は、洋上12階建ての動く
大都会飛鳥Ⅱを遊び尽くすための
飛鳥Ⅱ完全ガイド。

30号
2000年1月

飛鳥名誉船長
加山雄三さんと
3代目野﨑船長の夢の対談。

26号
1999年1月

今では航行することのできないミッドウェイ。
1999年「ハワイ・グランドクルーズ」で
飛鳥は日本船として初めて訪れました。
当時を振り返り、5代目幡野船長も
「人生観が変わるほどの経験だった」と語りました。

34号
2000年12月

船内で突然起こる謎の事件を名探偵と解き明かす
「四国一周ミステリークルーズ」に
初代浅見光彦役の辰巳琢郎さんが乗船。
内田康夫さんとのトークショーも開かれました。

42号
2002年12月

伊東ゆかりさんが
インタビューに登場。
飛鳥で過ごした7日間が自分を開放してくれた
と語りました。

編集部が選ぶ ベストインタビュー

伊東さんのインタビューは日本郵船の応接室で行いました。
「仕事で乗船したのに、こんなに楽しんでいいのかしらと思った」
と語る様子は、心の底から楽しかったことが伝わってきました。

37号
2001年9月

就航10周年を
迎えた飛鳥。
特集で10年間の歴史を
振り返りました。

50号では大会の写真も掲載されました。

48号
2004年6月

インフォメーションでは1997年まで
飛鳥にアシスタントパーサーとして
乗船していた田口亜希（旧姓寺井）の
アテネパラリンピック出場を伝えました。
田口はその後、北京とロンドンにも
出場し3大会連続出場を果たしました。
現在は日本郵船に所属し、2020年
東京オリンピック・パラリンピック
競技大会組織委員会でアスリート委員
などを務めています。

85号
2014年7月

就航25周年を記念した
南極・南米ワールドクルーズを発表。
初代飛鳥以来10年ぶりの南極を
目指しました。

79号
2012年9月

就航20周年を機に制服がリニューアル。
仕事の合間を縫って23人のオフィサー＆クルーに
撮影協力してもらいました。

89号
2015年12月

就航25周年記念で歴代船長が飛鳥Ⅱに勢揃いしました。
歴代キャプテンのインタビューも連載開始。

編集部が選ぶ ベストトーク

86号に登場した井上さんご夫妻は
新婚旅行で飛鳥Ⅱに乗って以来
家族の記念日にご乗船されてきました。
0歳でアスカクラブに入会された息子さんも
社会人に。これからはまた、ご夫婦で乗り続けたい
とおっしゃっていました。

カメラマンが選ぶ ベストショット

97号に掲載したアラスカの
写真は2015年世界一周
クルーズ中に撮ったものです。
目の前で崩落する氷河に
夢中でシャッターを切りました。
地球の偉大さを感じた1枚です。

93号
2017年5月

2018年世界一周クルーズは
3年ぶりにスエズ運河を越える待望の
コースとなり、発売後すぐに完売。
クルーズ・オブ・ザ・イヤー 2018
ではグランプリと国土交通大臣賞を
ダブル受賞しました。

101号
2020年春

101号を機にクラブ誌は生まれ変わります。
デザインはもちろん、内容もより充実させ
会員の皆さまに飛鳥Ⅱの魅力をお伝えしていきます。
どうぞご期待ください。

64号
2008年6月

ゲストエンターテイナーと
ゲストシェフが乗船するA-styleクルーズ。
現役世代にもクルーズを楽しんでいただこうと
週末や三連休を利用した新しいクルーズの形を
提案しました。初回は岩崎宏美さんと
落合務シェフがゲストでした。

71号
2010年4月

就航20周年を迎えるまでの1年を
アニバーサリーイヤーとして
様々な20周年記念クルーズを発表。

69号
2009年9月

2009年世界一周クルーズの帰路
飛鳥Ⅱは皆既日食を観測しました。
8代目中村船長は「苦労したのは
何時にどこへ行けば見えるのかの計算でした。
当日雲のない海域はどこか。どの程度
そこにいられるか。そこをうまく調整して
ベストポジションにもって行くことができました」
と当時を振り返りました。

74号
2011年4月

もっと知りたい
飛鳥のこと「ドック」。
年に1度のドック入りを
取材し、お客さまから
たくさんの反響が
ありました。

75号
2011年7月

2011年世界一周クルーズ中の飛鳥Ⅱは
アムステルダムでアマデア(初代飛鳥)と再会。
300名のお客さまがアマデアに乗り換えて
キール運河を通航しました。

編集部が選ぶ ベスト「もっと知りたい」

ドライドックで飛鳥Ⅱの下を
くぐらせてもらったり、命綱を付けて
巨大クレーンのてっぺんから撮影したり。
忘れられない取材です。

東山彰良さん

My Favorite
ASUKA CRUISE INTERVIEW

直木賞作家の東山彰良さんが
文藝春秋とのコラボレーション企画で
飛鳥Ⅱに乗船されました。
横浜からホノルルへの10日間
初めての船旅をどのように過ごされたのか伺いました。

船の上は どこかへ向かう 旅の途中の時間

船旅は出港からしてイベントですね。テープを投げたり、手を振りあったり。汽笛も鳴って、いよいよ旅に出るんだという気持ちが高まってくる。テープを投げるのも難しくて、あとちょっとで届かなくて悔しかった。肩の衰えを感じたりしてね。

横浜を出港して房総半島を離れてからは、島影を見ることはありませんでした。甲板にそって一周歩いても、360度海しか見えない。それが一週間以上続く。それだけでも新鮮な経験でした。

飛鳥Ⅱに乗っている時間はまさに旅の途中。どこかへ向かう旅の途中で何をするか。こういう時間の中で、人が考えることは、その人の人生で最後まで残っていくようなことだと僕は思うんです。

僕の場合は、大好きな本、音楽、お酒をたっぷり楽しみました。飛鳥Ⅱの船内にはお酒の飲めるラウンジやバーがいっぱいあって、音楽にあふれている。船の上には僕の人生に必要な物がギュッと凝縮されている感じでした。

横浜港から初めての船旅へ

毎晩通った マリナーズクラブが 船の定位置に

ある晩、パームコートで飲んでいたらジャズコンボ（アスカオーケストラの特別編成）が演奏していました。僕はテキーラをストレートで飲むのが好きなんですが、その時に編集者がリクエストしてくれたのが、スタンダードジャズの名曲「ストレート、ノーチェーサー」。すごく気が利いてますよね。ジャズコンボもさらりと演奏してくれて、もう感動しましたよ。

お気に入りの定位置マリナーズクラブ

マリナーズクラブへは毎晩通いました。飛鳥Ⅱには「ドン・フリオ」というテキーラが入っていて。アネホとレポサドの二種類あるのですが、妻はアネホ、僕はレポサドが好

きでいつも飲んでいました。毎晩行くと、なんとなく定位置みたいな感じになりますね。必ず同じ席に座って。定位置が船の中にあると落ち着くのでしょうね。常連さんも多くて、お酒を飲みながら楽しくお話しされていました。

ハワイ航路で読もうと決めていた本

船の中で読む本にはセンスが出ると思うんです。僕が飛鳥Ⅱで読むぞと決めていた本は、エルモア・レナードの「ラブラバ」。僕の大好きなアメリカの作家で、舞台はマイアミビーチ。装丁もヤシの木がデザインされていて、ハワイ航路で気楽にリラックスして読みたいと思っていました。キャビンのバルコニーやプールサイドで、のんびりと本を読む時間は本当に心地よかったです。

クルーズ中2回講演を行い、毎回たくさんのお客さまに来ていただきました。皆さんとても熱心で、質問もしてくださいました。講演後は本にサインを求められたり、声をかけていただいて。講演がお客さまと話すきっかけになりました。

コロア・ラムを試飲してニッコリ

オレンジ色に輝く洋上の日の出

カウアイのガイドさんとも仲良しに

作家になるまでのエピソードを語る

僕がもし飛鳥を舞台に本を書くとしたら、100日間の旅の中でお客さまがギャング団を組織してお互い対立するという話です。「この場所は俺らのもんだ！」と、抗争する。一つの空間で100日も過ごすうちに、いろいろな人間関係が生まれると思うんです。実際、ひとりで乗っていらっしゃるお客さまも多くて、船上でお友だちをつくられて、また次の旅で顔を合わせることもあるとお聞きしました。船内では「あら、また御一緒ね」と挨拶されているような場面もお見かけしました。

飛鳥Ⅱの間近にイルカの群れも

10日ぶりに見た島影にテンションが上がる

船旅ならではの体験と言えば、時差調節もそうですね。東へ向かう航路なので、1日1時間ずつ減らして目的地との時差を微調整していく。6月8日のドレスコードが2種類あってどういうことなのかと思っていたら、「6月8日A」と「6月8日B」の2日あって、面白い体験でした。

日付変更線を越えるときは、ブリッジから船内放送がありました。皆さんデッキに出て、両手を広げたかっこうで写真を撮っていて。太陽が真上にあるので、影が真下にしかできないんですね。

カウアイ島が近づいてきたときは、ただの島影とは言え、10日間ぶりに見る陸地ですから興奮しました。時間があるからと、キャプテンがナパリコーストの絶壁を海の方から見せてくれました。僕はちょうどプールで泳いでいて、妻が「見逃してしまうから早く！」と呼んでくれて。普通はヘリコプターなどからアプローチするそうですが、船から見上げるとスケールが違います。本当に迫力がありました。

カウアイ島では映画の舞台を訪ねラム酒工場へ

カウアイ島では大好きなお酒を飲むことを優先したので、それを邪魔しない範囲での観光をしました。楽しみにしていたのがラム酒工場「コロア・ラム」の見学です。ハワイ産のサトウキビを使ったラムで、試飲したらとても美味しかったのでお土産にも買いました。

カウアイ島は僕にとってはニワトリの島です。船から港を見ていても、ニワトリがとことこ歩いているんです。現地のガイドさんに理由を聞いたら、天敵がいないからだと。ニワトリが普通にそこらを歩いていて、後ろにヒヨコを連れていたり、和みました。猫も襲わないんだそうです。ガイドさんも食べないと言っていました、地鶏なのにね。

ドライブしながら、映画「ブルーハワイ」のロケ地などを見て、「カウアイ・ビア」にも行きました。ランチもレストランには行かず、ガイドさんオススメのお弁当を買って食べました。ラウラウと言って、葉っぱで豚肉を包んで蒸し焼きにしたもの。とても美味しかった。ハワイ自体が初めての旅でしたが、本当に楽しかったです。

3日目から罪悪感がなくなるロングクルーズ

仕事があると、ロングクルーズに乗船するのは難しいですよね。でも、機会があったら是非乗っていただきたい。僕も最初の2日ぐらいは、こんな無為な時間を過ごしていて良いのか？と思っていました。でも、3日目ぐらいからのんびりすることに罪悪感がなくなって、心地よくなってくる。だんだんこれが本当の人生なんだろうな、みたいなことを考えたりして。一週間か10日ぐらい、何にも束縛されない豊かな時間を過ごす。とてもリフレッシュできますよ。

19世紀にマーク・トウェインが「赤道に沿って」という印象深い紀行本を書いています。赤道を越えてオーストラリアやインドへ旅していて、シンガポールのマラッカ海峡などを通ったのでしょうか。昔の船旅なので、今よりももっと時間がかかったでしょうね。本を読んでマーク・トウェインの乗った船はここを通ったのかというのを突き止めながら、文豪の足跡をたどったら、とても素敵だと思います。「マーク・トウェインの旅クルーズ」どうでしょう。僕が企画しようかな。

※2019年6月、「ハワイ・アラスカ グランドクルーズ」中のビスタラウンジで。

Akira Higashiyama

台湾生まれ。
幼少期を台北で過ごし、9歳の頃に日本へ。
『逃亡作法 TURD ON THE RUN』で作家デビュー。
15年『流』で直木賞受賞。
『罪の終わり』で中央公論文芸賞、
『僕が殺した人と僕を殺した人』で
織田作之助賞、渡辺淳一文学賞、
読売文学賞小説賞の三冠に輝く。

My Favorite
ASUKA CRUISE INTERVIEW

Photographs:Nanae Suzuki ©文藝春秋

ASUKA II RENEWAL PROJECT

11デッキはどう変わるのか

着々とプロジェクトが進み、少しずつ細部も見え始めてきた飛鳥Ⅱのリニューアル。今回は11デッキのレストランやラウンジを中心に西口総料理長、黒木メートルドテル、小山ホテルチーム長に話を聞きました。

［リドガーデン］

［リドガーデン］

――リドガーデンはアイランド型カウンターでどう変わりますか？

小山　今回のリドガーデンの改装はお客さまを今よりもお待たせしないというのが第一条件です。アイランド型のカウンターは全部で5つ。2つが冷菜用、3つが温かいお料理用です。

西口　その場で料理をつくってサーブできるライブキッチンも2つできます。朝は左舷側をオムレツ用のステーションにして、右舷側ではご飯やスープをサーブしようと思っています。

小山　ランチのカレーもサーブに多少時間がかかるので列が長くなってしまいますが、列から独立したライブキッチンでサーブすればスムーズですよね。

黒木　アイランド型になると、お客さまの流れは全然違うと思います。列が長くなっていると、もうちょっと食べたいなと思うお客さまも躊躇されてしまいますからね。

小山　椅子やテーブルなども全て一新されます。

黒木　リドガーデンは今よりも明るい印象で、カフェのようなカジュアルな雰囲気になりますね。

メートルドテル **黒木慎一**
Shinichi Kuroki

――お食事はなにか新しいことを考えていますか？

西口　リニューアルを機に、昼間のビュッフェは洋食だけでなく、中華や和食なども取り入れようと思っています。

小山　これまでよりも食事を置くスペースが増えますからね。シェフにはがんばっていただかないと！　新しいカウンターにはホットプレートを置き、さらに上からは保温用のライトを点けて、上下からお料理を温められます。冷菜用のカウンターは、大理石プレートの下に冷媒が入っていています。

西口　温かいものは温かいまま、冷たいものは冷たいまま。ベストな状態でお客さまに召し上がっていただくことができます。ビュッフェスペースも増えるので、工夫を凝らしお客さまを飽きさせないメニュー構成を考えています。

黒木　冷菜用のカウンターもスイッチを切り、ホットプレートを置けば、温かいお料理が出せる。いつも同じ配置ではなく、クルーズや季節などによってフレキシブルに変えられる。サービスする側も楽しみながら、お客さまをご案内できそうです。

小山　今は、まず大きなトレーを手にとって、そこにお皿やグラスをいくつも載せて席に運んでいきますが、リニューアル後はこのトレーを廃止します。

西口　ホテルのビュッフェのように一皿、一皿、お料理をとっていただきます。

小山　トレーがあると、ついつい一度に全部とろうとしてしまう。ビュッフェのお料理はなくなりませんので、急がずゆったりと、お好きなものをお好きなだけとっていただきたい。

西口　我々もまだ図面しか見ていないので想像の段階ですが、海外のロングクルーズならライブキッチンで麺類を、国内クルーズならお昼にローストビーフやシュラスコをお出ししようかな、飲茶もいいかなと考えています。

総料理長 **西口雅浩**
Masahiro Nishiguchi

黒木　チャイニーズやハワイアンなど、テーマ性のあるビュッフェも楽しく演出できそうですね。リドガーデンには飾り棚もできるので、季節やテーマごとのディスプレイで雰囲気を変えられそう。

小山　食器も今まさに選定しています。同じ食器で統一するのではなく、今回は色も形もいろいろ選んでいます。

黒木　お食事を盛り付けるトレーも今は全部同じ四角いものですが、カラフルなホーローの鍋やフライパンでカウンターに置くんですよね。

西口　ギャレー（厨房）のオーブンからそのまま持ってきたかのように、パエリアなら鍋ごとカウンターにのせたり。盛り付けの仕方などもいろいろ工夫できそうです。

――リドカフェやパームコートも変わりますか？

小山　リドカフェのビュッフェは今のままですが、テーブルエリアとの境をなくすので、列に並ぶのではなく、好きなところからアプローチできるようになります。

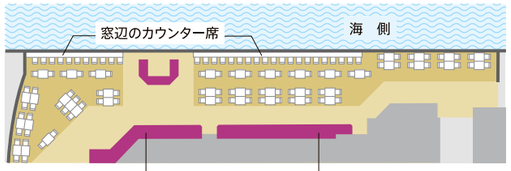
ホテルチーム **小山勝利**
Masatoshi Koyama

黒木　窓辺にはカウンター席ができて、海を眺めながらお食事を召し上がっていただけます。さらに2人席のテーブルも入れて、全体の席数を増やします。

小山　リドカフェは家具を全て替えることでイメージを一新します。同じく11デッキのパームコートも椅子やカーペットが替わります。ゆったりとした南国風の雰囲気は

サンプルとして取り寄せた食器類

アイランド型カウンターの実物大模型で検証



［リドカフェ］

そのままにして、窓辺には背もたれの大きな椅子を配置します。海の眺めを楽しみながら、のんびりとおくつろぎいただけます。また、ラウンジとしてだけでなくコンサートの場としても人気が高いので、今よりも席数を増やします。

黒木　かなり印象が変わるでしょうね。コンピュータープラザはイー・スクエアに生まれ変わります。パームコートとつながった空間になり、飲み物をご提供します。

［パームコート］

――ザ・ベールはどのようなレストランになりそうですか？

小山　ザ・ベールはオープンシーティング制が導入されるので、お客さまがいついらっしゃっても必ず席があるように、2人席を30テーブル配置します。プレミアダイニングですので、家具も完全オリジナルで作っています。今、デザイナーが設計したものを、北海道で製作しています。

黒木　お客様がどのようにご利用されるのかまだ予想もつきません。でも、お客様にとっては好きなときにお食事に行けるというのは、自由度があって魅力ですよね。もしも一度に大勢いらっしゃったらどうするかなど、いろいろ想定して……。ギャレーの方も大変でしょうね。

西口　今までは一回目のお食事で何人、二回目で何人とあらかじめ分かっていました。これからは、テーブルごとに料理の進み具合も違う。街の普通のレストランのような感じですね。

［ザ・ベール］

小山　改装を終えてシンガポールのドックを出たら横浜港に着くまでの間に習熟オペレーションをします。クルーにお客様役をしてもらって、実際にお料理をつくってサーブするところまでやってみる。ぶっつけ本番にはできませんから。

西口　この時間帯に、このぐらいお客さまがいらっしゃるという傾向がわかるようになるまでは多少大変だと思います。

黒木　今は頭の中でシミュレーションするしかない。本当にこの習熟オペレーションが大切です。そこでしっかり練習しないと、すぐにクルーズがスタートします。なにしろ1か月後は世界一周クルーズですから！お客様の流れに自分たちを合わせていくという感じでしょうね。

西口　クルーたちの日ごろの積み重ねがきっと生きてくると思います。柔軟に、そして飛鳥らしく。リニューアル後の飛鳥Ⅱをどうぞ楽しみにしてください。

［ザ・ベール］

※記載内容は2019年10月時点のものです。CG画像や改装内容は変更・中止となる場合がございます。

Photographs:Tetsuya Oomuro

上田寿美子さん

テレビでもおなじみのクルーズライター、上田寿美子さん。
国内外の最新のクルーズ市場について
そして飛鳥Ⅱリニューアルに対する期待をお聞きしました。

歴史ある飛鳥Ⅱが現代のライフスタイルに合わせて大改装！

今回の大改装、もう本当にワクワクしています。世界の客船の中で今、ある種の流行と言えるのが「ニュー・ラグジュアリー」の世界です。一つの船の中に、非常に特化した高級感のある施設を組み込むスタイルです。

飛鳥Ⅱのリニューアルにもそれが取り入れられていますね。例えば、和洋室。日本ならではの感覚で表現された高級スイートができる。さらに、プレミアダイニングも「ザ・ベール」と名前も変わり、2人席を増やしてパーテーションを設ける。昔と比べ今のクルーズは「個」をより重視するようになりました。客船の世界的な傾向でもあるし、陸上でもそうなっていますよね。歴史ある飛鳥Ⅱが、現代の方達の嗜好やライフスタイルに合わせたニュー・ラグジュアリーの世界へと進化する。本当に楽しみですね。

パームコートの壁を取り払って、ブックラウンジができる。Wi-Fiサービスも充実する。それに、アイランドスタイルのビュッフェ。長い列もできないし、麺類が食べたければそのものズバリのここへ、サラダを食べたければあちらへと機能的です。これも昨今の外国船ではスタンダードになっています。

一番体験してみたいのは露天風呂ですね。日本の方にとっては水着で入る屋外のジャグジーは、開放感がちょっと足りない。そこへいよいよ露天風呂ができるなんて、わくわくしますね。それも船の上で！ 新しい進化だと思います。

それに加えて、来年の排ガス規制に向けてスクラバーを搭載し、レーダーを新しくして、船舶自動認識装置も入れるなど。お客さまには直接見えなくても、環境に配慮し、安心安全度が増すというのはとても大切なことだと思います。そこへ大幅に着手される。航海計器などあらゆるものが日進月歩で進化していますから、大事なことだと思います。

A3（エースリー）構想はうれしいニュース大改装の先にどんな扉が開くのだろう

飛鳥Ⅱは「世界トップクラスの船を造る」という建造理念の元にクリスタル・ハーモニーとして誕生しました。そして、それにふさわしい大喝采をもらった船です。その船が2006年に日本船籍となり、飛鳥Ⅱと名前を変えて、日本のお客さまが乗りやすい船として再デビューを果たしたといういきさつがあります。今回の改装で、飛鳥Ⅱはさらにもう一段階先に進む。そしてさらに、今度はA3という新造船構想も出てきた。私は本当に、うれしくてうれしくてしかたがないです。

船というのは、一隻一隻名前を授けられて生まれてくる大変個性のある乗り物だと私は思っています。A3はA3の個性を持って、船としての機能は最新鋭で、なおかつ日本のお客さまに乗りやすい、そして世界のお客さまからも注目される船として誕生してほしい。そうすると、もう一歩も二歩もクルーズ市場が持ち上がっていくと思います。是非、新しい船も個性豊かに活躍していただきたいとお祈りしています。

※2019年8月「夏休み 鳥羽クルーズ」中のパームコートで。

SUMIKO UEDA
外国客船の進水式や命名式に日本代表のジャーナリストとして
招待されるなど、世界的に活躍するクルーズライター。
テレビ番組への出演、クルーズセミナー講師も務める。
著書に『豪華客船はお気に召すまま』
『ゼロからわかる 豪華客船で行くクルーズの旅』などがある。